



が名乗りを挙げることはとてもできないというメンバーの声に、今成さんからは、日常のいろいろな場面で、その人ができる範囲で、周囲の人に自然にアルコール症が病気だと分かってもらえるような、そんなきっかけづくりをAAメンバーに期待したい、という意見が述べられました。

メンバーはもとより、医療や福祉の分野の方からもそれぞれの見解が積極的に交換されましたが、この場で投げかけられた小石の波紋がそれぞれの出席者の心に広がり、アノニミティに対する考えがまた一つ膨らんだなら、またいつの日か、それを分かち合える機会が持てたらと考えています。

山本

## PART II.

### 真剣に耳を傾けた出席者は

約3時間にわたる長時間のパネルディスカッションであった。前半の約1時間半はマスコミ、市民運動、AAメンバーからのパネラーが各々の立場から意見発表があり、その後、質疑応答、意見交換が活発に行われた。(関連記事1面)

まず、AAメンバーから、ジャーナリズムに対する不信感、すなわちプライバシーの遵守、匿名の厳守等について質問があり、サンケイ新聞橋本氏より、「取材する側と取材される側とのズレが大きい場合が多い。自分ではこのように話したと思っていたが取材者側が間違っただけで取材し、記事にしたものが、被取材者に多大な迷惑をかけてしまうことがある。大切なことは取材の目的、本質を見極めることであり、何をねらいにし、どれを視点にし、取材をしなればならないかを考えている」

ついでY市のあるメンバーは、マスコミに関連して「自分はスラム街で何も残されていない状態だったので、アノニミティは意識しなかったのだが、新聞取材で実名を頼まれた時、スラム全体の問題になるので断った」と発言。

また医療関係者の話(新潟の病院医師)は、医療行為を行う上では、医者立場から匿名で治療しにくいとか、しやすいとかはない。ただ日本の現在の状況から考えて、いわゆる偏見ということから個人レベルで名を伏せておきたい方は匿名にすべきだと思う。との発言がされ、更に福祉行政関係(東京の福祉事務所)では、特殊な例であるが、1年前から福祉事務所で生活保護を受けている患者さんたちとミーティングを行っている。現在行っているミーティングの中ではアノニミティを守って戴いている。という理由はアルコール依存症の人が一般に変な目で見られているのと同時に、生活保護を受けているというだけでも、「アイツ等は税金で生きているのだ」というように見られている現状なので、ア症の人は二重にハンディキャップを負っている。

お互いにプライバシーを守ることが大切であり、名前を名乗ることは行っていない。他の自助グループでは名前を出すこともあるが、AAではニックネ

ームを使ったり、匿名にするのが原則なのでそれを守っている。初心者の方、いわゆるビギナーの方は特に名前を伏せることが大切であり、ビギナーの方がAAのメンバーに入り易いものを作り出すことが必要である。

愛知県の病院の心理担当の方は次のように述べている。

愛知県では3年程前まで専門家による研究会(断酒会と共に)があった。その研究会の中でいわゆる『先生』になってしまう人がおり、本人にはそうゆう意識がなくても、廻りの人たちが『先生』と見てしまうことになり、その研究会は解消してしまったことがある。

病院内の例会で『だれだれさんのおかげで良くなった』とか『何々さんのおかげで……』というように人の名前を出し、その人を誉めてしまうということがあった。ア症の回復には人の名前を公にすることの有無は非常に重要な要素と思える。アノニミティの必要性はここに有るといえる。

AAメンバーの氏は、病院を退院後、施設からAAにつながって4回ニックネームを変えた。それはAAの中で、有名になりたいというものがムクムク浮き上がってきたという事も理由の一つである。自己認識したい、AAの中で認めてもらいたいという気持ちがあったからだと思う。

AAに来て仕事に就く時、自分を隠さず履歴書に入院経歴まで記入し、自分がア症であることを書いて就職した。会社の理解があり、仕事とAAの両立ができています。

名古屋のメンバーS氏は、地域や職場でア症の市民権を得ようとする、無理な点があり、職場や地域で声を大にして市民権を得ようとする、自分の立場が危うくなる。

自分自身、AAのメンバーであるかは別にして、自分がア症であることを、みんなの前で堂々と言える日が来ることを望んでいる。

最後に、当日ラウンドアップには出席できなかった新潟のメンバーから手紙で、地方都市の場合、ニックネームを言って素姓を隠しても、全部お互いに分っている訳で、その場で名前を隠すという意味よりも、AAの中ではだれも特別にエラかったり、指導者になることはなく、すべての人たちが飲んでしまえば同じ共通点に立つ一人だという意味ではないか、との趣旨の意見が寄せられた。

フォーラムに出席して感じられたことは、世間一般の偏見を取り除くべく、そしてア症が市民権を得るには、私たちが常日頃から前向きの姿勢を持ち続け、社会の理解を深めてもらうべく努力をしていくように心がけることの必要性を強くした次第である。

このフォーラムが今回のみで終ることなく、機会ある度に問題提起をし、前向きに歩を進めてゆくことが私たちの使命ではなからうか。

# AA 関東 ' 8 7 秋期ラウンドアップ

実行委員長 渡辺

前委員長より、今回の催しを依頼された時『やろう』という気になり、久し振りに緊張感というか、何というか、身が引きしめる思いがしました。

第1回実行委員会から14回まで、仲間と集う喜びを感じながら着々と準備が進んでいきました。

最初は委員の人たちの名前と顔が一致せず、みんなには迷惑を掛けたと思います。準備といっても、前回、前々回の仲間の働きによって順調に進んでいきました。(仲間の経験を受け継ぐ事で)

台風19号が驚異的な勢力を保ち、一時はどうなるのかと心配しておりましたが、晴天のうちに当日を迎える事ができ一安心です。僕も愛車を運転しながら、これから始まることへの期待と不安で一杯でした。

3時になり受付が開始され、仲間、関係者がつぎつぎとやってきて、ただ、忙しいの一言でしたが、受付をしている仲間の顔は、どの顔も真剣そのものでした。この日のために努力してきたんだ、という感じでした。

各地方からの参加が多く、広報の宣伝が良かったんでしょう。握手、握手で、手が痛くなるくらいでしたが、嬉しいやら、なつかしいやらで。

プログラムにフォークダンスを取り入れてみましたが、残念ながら人気がいまいちでしたが、経験として今後に残ると思います。

24時間ルームも一段と大きな部室を借りる事ができました。2日間とも満員で、あちらこちらで小ミーティングが始まっていました。真剣な顔やら、大笑いしているところもあり、フェロシップの大切さが伝わってくるようでした。催しの委員の人たちは、寝る間も惜しんで仲間の接待に張り切っていたようです。お疲れさまでした。

今回のラウンドアップには、初参加の仲間が3分の1もきていて、年齢層も一段と下がり、全体的に活気があったような気がします。僕自身にとってもとても良い思い出でした。

サヨナラ・ミーティングで、初めて参加した仲間の話の中で、『また来たい』という言葉がありました。この一言でラウンドアップの意味が活かされたと実感し、みんなで努力してきてよかったと、目頭が熱くなる思いがしました。

メイン会場には大きなポスターが貼ってあり、船の絵が書いてあり、港に着く、そして港を離れる。僕自身説明を聞くまで分らなかったけれども、まったく良く考えたもんだ、と感心の一言です。ラウンドアップで得たものは何か? これから少しずつ感じていく事でしょう。今は責任を終えた安堵感で一

杯ですが。

誰もいなくなったロビーはどことなく寂しい感じがし、やがて来る春を待っているかのようでした。実行委員をはじめ、多くの仲間、関係者の皆様には御協力を深く感謝しております。J S Oのスタッフの方々も毎日毎日の問い合わせにさぞ四苦八苦したでしょう。お疲れさまでした。

愛車のハンドルを握りながら、新たなステップへと走り出す自分に『ごくろうさん』と言ってあげることができました。

多くの仲間、関係者との出会いを胸に、越生の町を離れていきました。

いろいろとありがとうございました。又、会いましょう。



## [新刊図書案内]

### 1. ビッグブックの小型版(ポケット版)

¥ 1, 800

B - 6 判 (13x18 cm), 印刷明瞭な縮刷版

ミーティングにも使用できるハンディな装丁  
(誤訳及び誤植を修正した改訂版)

### 2. AAサービスマニュアル(手引書)1987

¥ 1, 800

B - 5 判 130 頁 ビル W . 著

< 内容 >

評議会・代議員・地区幹事及び地区地域委員会・評議員・地域活動・常任理事会・G S O、等に関してそれぞれ役割、活動、サービスの内容等を具体的に表したまさにサービスの手引書である。

## 第 2 回 サービス・フォーラム を終えて

— AAという器<sup>うつわ</sup>を作ろう —

11月22、23日、東京神宮の日本青年館で、「私の町のAAはうまくいっている。なぜ今全国なのか？」というテーマのもとで、全国サービス体系についてのフォーラム（話し合いの集り）が開かれた。参加した仲間たち、運営にかかわった仲間たちの、「新しい試みを成功させよう」という情熱だけに支えられて、一日目夜から二日目にかけて最高の盛り上がりを見せる中で終了した。

フォーラムでは「こうしていこう」という一つの方向性は生まれてくるものの、決定はなく、提言があるだけである。

AAは、狭い意味では、アルコール中毒者本人だけの集りだが、広い意味では、そのサービス体系にAAプログラムへの深い理解と賛同と指示をあたえてくれるノン・アルコールックが参加するところまでを含む。そのAAという器<sup>うつわ</sup>づくりだけに焦点をしばって話し合ったのがこのフォーラムであった。

「サービス」とは、私たちの唯一の目的である、まだ苦しんでいるアルコール中毒者にメッセージを運びやすくするオフィス運営や文書活動、すべての委員会活動を含むわけで、メンバーに対する責任、社会に対する責任を、どこが、どういう方法でとっていくかについても話し合った。

日本を北海道、東北、関東甲信越、中部北陸、関西、中国四国、九州沖縄の7地域に分け、各地域から数名の全国評議員を選出して作られる「全国評議会」がAAの核心であり、器の心臓部であり、責任の受け手と考え、その全国評議会について、「全国評議会推進実行委員会」を作り、検討推進していこうという方向が生まれたのである。

私たちAAメンバーが、日々新たにソブラエティを楽しみ、アルコールのない文化の中で生きていくために、アルコホーリクス・アノニマスという器づくりについて、熱心な作業を怠りなく続けていくなれば、AAの将来は輝きあるものであることが確認され、明日に向けての一步を踏み出したのである。

第2回サービスフォーラム実行委員会 林

## 一点から線へ、線から絆へー

だれが何をするかではなく、何が必要であるかが今回のサービス・フォーラムの分かち合いの中で確認され、「AAの霊的協力」つまり心から一体であることが、全国のメンバーの間で認識され、全国サービス体系の1987年のスローガンも決定した。

〔スローガン：  
『求めるところに確かな奉仕』〕

健康的な精神は確実に広がる、と希望は持ちつつ企画する中で、いったい全国の仲間がサービスだけのことで参加してくれるのだろうか、と正直なところ内心は心もとない中でスタートした。

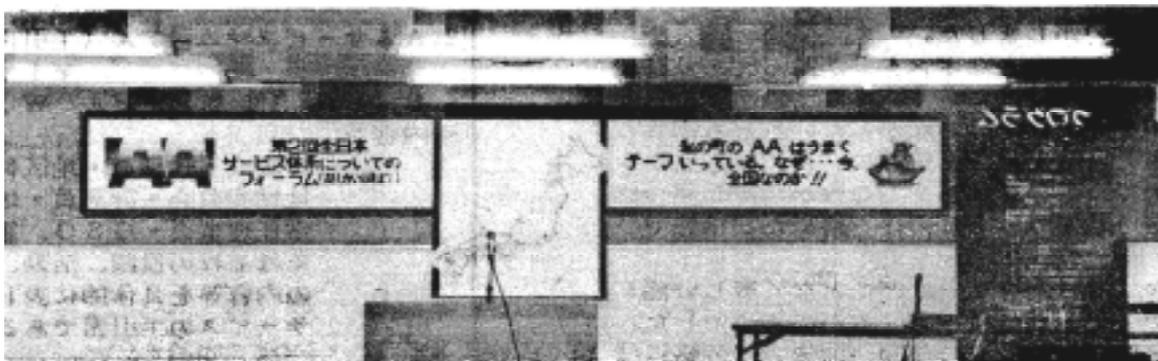
しかし、われわれの愛と謙遜は大きな力となりました。それはAAメンバーひとりひとりのソブラエティへの感謝でもあり、また責任の自覚だと信じられた。東京130名、大阪2名、名古屋3名、山口1名、長崎1名、鹿児島2名、富山1名、長野1名、新潟1名、福島1名、水沢1名、宇都宮1名それに盛岡からはステキなアメリカのミスを含む3名の参加があった。

そして、サービス体系の確立には必ず必要な手引書、アメリカ・カナダのサービスマニュアルがJSOとの連携プレイで大阪のメンバーの手によりワープロ入力され、更に印刷製本まで大阪で終え、すばらしい一冊の本となって完成して、当日メンバーの手にわたった。

また同時に、関東文書委員会で和訳中の「AA12の考え」も、JSOのボランティア、スタッフの協力で、わずか1週間の準備期間に50ページのワープロ打ちと5万枚のコピー、製本が仕上げられ、当日準備された。感謝。

今回の資料配布費用（郵送費含む）は約12万円と多額になったが、広報・グループ・提言の各委員会の集会献金、および当日の会場献金を充当し、赤字にならずに精算できた。また当日宿泊できなくなったメンバーからも宿泊費を献金として利用して戴きたいとの申し出もあり、有難く思っている。

AAの分かち合いの頃には、必ず大きな力があり、プログラムが進むにつれ、点から線へ、線から絆へと広がっていく。メッセージを効果的に伝えていくため



のグループの憲章・『良心』が高まり、これらのメッセージ活動の方針を、それぞれのメンバーが個々に感じたことは、2日目の朝の分科会報告(書記による)を見ていただければ納得してもらえらるだろう。また、当日の各スピーカーの話も録音されており、関心のある方は是非耳を傾けていただきたい。

さらに、大阪のメンバーより提案されたように、AA 15周年記念大会をぜひ大阪で開催できることを希望して、今回のサービス・フォーラムの私の感想とさせていただきます。最後に付け加えれば、ビルWの言葉のように、まだ会ったことのない、われわれの将来の仲間に、必ずAAのプログラムが届くために、立ち止まってはられないことを自分自身の胸に刻み、新たなスタートにしていきたい。

(今井)



## 山口、高知へも メッセージが

11月1日、「第1回山口AAセミナー」が宇部の高嶺病院で開かれた。当地のAAメンバーにとっては初めてのAAセミナーにもかかわらず、JSOと連絡を取りながら準備を整えてきたようで、会場は第1回目とは思えないほど行き届いたセッティングがなされ、約120人前後の人々が集っていた。

まず「院長のお話」から始まり、午前中は東京のメンバーがAAの紹介を、そして午後は、長崎、福岡、大阪、東京のメンバーによって「本人の話」が夕食後7時まで進められた。AAのプログラムを通してアルコール中毒から回復し、今日のソプラエティを得た仲間たちの話に、集った人たちは吹き出したり、目頭をおさえ涙したりしながらそれぞれ真剣に聞き入っていた。休憩の時には、この時を待っていたかのように、メンバーに家族のことを話したり写真を見せにきたり、という光景も見られ、共にある喜び、心の触れ合いを感じる一瞬なごやかな雰囲気を感じられた。夕食後は当地の宇部グループとの分かち合いミーティングとなり「AAは一つだ」を実感した。

さて、この病院はアルコール中毒の治療に熱心で関西地域や地元の仲間からAAメッセージも運ばれており、かつてアルコール中毒者が大の苦手だったという当病院長も、自らアメリカのAAグループを視察した

り、AA資料を研究するかたわら、院内に「ビッグ・ブック」や「12&12」を中心に学ぶ「ラーニング・グループ」を設置、入院中の治療の一環に役立たせている。

一方、院内にある保護室は、淡いピンク色に塗られ、幻覚、幻聴がこれにより9割がた消える効果があるとか。またふる場にいたっては、プールと間違えるほどの大きな浴槽に広びろとした洗い場で、患者への思いやりが伝わってきた。

翌日は地元、宇部グループと東京、大阪のメンバーとで「アノニミティとグループの棚卸し」というテーマでのミーティングをもった。

山口セミナーを終え、駅まで山口の仲間に見送られ、2番目のメッセージの地、高知へ向かう? 瀬戸内海を越え、四国を縦断し、夕刻になってやっと会場となる宿舎へ到着。

その日直接、東京、大阪、尾道から駆けつけてくれたメンバーと合流し、地元のメンバーとともに遅くまで明日のオープン・スピーカーズ・ミーティングの打ち合わせがなされた。このような催しは高知ばかりか四国でも初めてのことである。翌11月3日、午後1時、いよいよ高知グループのメンバーの司会で、「飲まないで生きる」というテーマのもとに、開始された。会場は当グループのミーティング場でもある教会のホールである。場内には、医療、行政等の関係者や家族の方たちも見え、一人ひとりの仲間がどのように、飲まないで、今はどうやって生きているのかという話に熱心に耳を傾けていた。

今回のオープン・スピーカーズ・ミーティングでは、AAの遺産の一つ、「サービス」についても話された。そして、これからのAA西日本地域の発展とともに、高知県下のまだ苦しんでいるアルコール中毒者が一人でも多く救われてゆくためのサービスがなされるようにとの願いが、フェロウシップのなかで確認された。

高知グループの「小さな祈り」の言葉には、各区切りごとに、必ず『今日一日』を加えて言うそうで、このミーティングの最後にも参加者一同でこの小さな祈りに心を一つにする時を持った。

お互いのソプラエティとこれからの仲間の手助けのためのサービス、そして四国地域にもAAが発展してゆかれることを祈って、このオープン・スピーカーズ・ミーティングの幕は閉じられた。

広報委員会 スタッフ



## 個人献金や バースデー献金も！

AAの最初のメンバーのビル・Wは「ビルに話させると、また献金の話をする、と言われていたが、今回も献金の話をする。AAを支えているのが、私たちの献金だからです」と言ったことがあるそうです。

私もまたビルにならって、同じお願いを皆さまにいたします。

AAは、自由意志で参加した集団であり、自分たちの献金だけで自立し、どこからもヒモにつけられない団体です。

お金のある人はお金を、時間にゆとりのある人は時間を、能力のある人は能力を、AA全体のために役立たせる。これがAAの活動の基礎です。

あるメンバーは「AAに対する献金は、一種の投資であり、ある種の保険料である。献金によってAAは有効に活動ができ、私たちの生活は、AAにその源泉があるからだ」と言っています。

AAの献金は、全世界で様々な種類のものが生み出されています。

おなじみの、ミーティング場のカンに入れるとカタンと音のする献金、あるグループでは「長い間、私たちの献金のカンは振ると大きな音がしましたが今では音が変わってきました」と言っております。

この他に、誕生日のときにするバースデー献金をGSOに届けてくれる仲間がいます。

酒をやめて初めて手にした月給袋から、喜びと感謝と共に、献金を送ってくれたメンバーもありました。

オフィスにお金がなくなる。すると、どこからとなく送られてくる献金もありました。

AA全体の活動をささえるために定期的に持参してくれる人もあります。

このような献金は、GSOに集まり、AAの唯一の目的「まだ苦しんでいるアルコール中毒者にメッセージを運ぶこと」のための仕事に使われています。

またAAの献金をお金でなく、時間で支払うメンバーもおります。この人たちは、AAの仕事を無料で奉仕することで支えています。絵を書いてくれるメンバー、翻訳やパンフレットを作るために協力してくれる仲間もいます。

先日ケースワーカーさんたちの研修会に出席した折、熱心な討議を聞き、その中で語られる、AAのグループ活動の質の向上の要求を感じ取りました。そして、これらの方々との一層の連絡の強化を計る必要を感じました。

この状況の中で、GSOをしっかりさせなければと思ひ、皆さまに再び、献金のお願いをする次第です。AAの未来のメンバーたちのために献金を。

(AA日本GSO代表 市川)

## アノニマスとは何か？

AA、アルコールリクス・アノニマスの人間は、その回復についてのメッセージを個人対個人ベースで伝えるのを決して怠らない。しかし仲間の秘密は絶対にもらさない。彼らは、この方法で、回復の見本として役に立ち、それで、まだ苦しんでいるアルコール中毒者が手助けを求めるようになるための刺激ともなる。

しかし、テレビ、ラジオ、映画、新聞などのいわゆるマスコミメディアの上では、個人の名を伏せることを、AAの伝統は厳格に求めている。

それは次の三つの理由による。

1. まだ苦しんでいるアルコール中毒者は、自分の正体が暴露される恐れのあるいかなるところからも、助けを求めたがらない、ということのをわれわれは経験によって学んだ。

2. AAのメンバーであることを世間に認められていたがるアルコール中毒者は、飲んでしまう可能性が大きいことを、過去の事実が示している。

3. 個人が注目を集め、また個人を宣伝することは、利己的な競争と異なった見解についての葛藤を招くことになりかねない。

AAは創立50周年を迎えたが(㊟現在では53年目になる)、世間に対して無名であることは生まれや育ち、社会的地位などによる一切の差別を排除して、110万以上(㊟現在は150万)の仲間の一致を保つのに役立っている。またそれによって、手助けを必要とする無慮幾百の人々をひきつける魅力を保っている。

AAの伝統11. われわれの広報活動は宣伝により促進することよりも、ひきつける魅力に基づく。新聞、電波、映画の分野で、われわれはいつも個人名を伏せるべきである。

AAの伝統12. 無名であることは、われわれの伝統全体の霊的基礎である。それは各個人よりもAAの原理が優先すべきことを、いつもわれわれに思い起こさせるものである。

AAワールド・サービス

